



祐介の目

大田ゆうすけ No.83
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

7日の11時(干潮)に堰の様子を見に行った。河川敷が完全に水没する程の流量にもかかわらず河口堰のゲートは全開していなかった。中央4門のみ全開、両サイドの6門は半開で約7割の開口であった。すぐ管理事務所に問い合わせたが、所長の見解としては現状ベストのゲートコントロールをしている。確かに全開すれば放流量は増えるが全開後のリスクも大きい。すなわち河口湖が塩水化し工業用水として使用できなくなるという。

7月4日から降り始めた豪雨、福山市でも土砂災害や冠水等の多くの被害が発生した。被災された皆様に心からお見舞いを申し上げたい。近隣の市町と比較すれば被害はまだ軽度と言えるが、芦田川の流量データを分析すれば危機は目前であった。

まず芦田川流域の洪水を制御する八田原ダムを検証する。八田原ダムは平常時2300万トン貯水しており、洪水時の調整容量として3400万トンを空けて合計5700万トンの貯水能力がある。6日22時にダムへの流入量は毎秒800トンを超えたが、放流量は最高でも毎秒383トンに抑え約半分に調整している。降雨が小康状態になった7日の12時の貯水量4000万トンをピークに貯水量は減少を始めている。ダムの目的である洪水調整機能を見事に果たした。

次に芦田川河口堰だが、私は

さらに詳しい検証が必要だが河口堰を全開できなかったため、7日0時の芦田川山手観測所の水位は過去最高の6mに達し氾濫一步手前であった。さらに本流の水位上昇により瀬戸川や高屋川はバックウォーター現象により逆流してその支流の福川や吉野川が溢れた可能性は否定できない。八田原ダムが機能していなければ芦田川は決壊し、真備町や三原市と同様の被害が生じていただろう。今回の豪雨災害を教訓に工業用水の代替水源を真剣に検討しなければならない。私の提案する下水処理水を再生して工業用水に転用し、河口堰は潮汐発電所として活用する構想を検討するプロジェクトチームを立ち上げたい。